

## 設立 10 周年の軌跡とこれからのコンクリート診断士の役割

2008 年 8 月 1 日に設立した高知県コンクリート診断士会は、本年の 8 月に 10 周年を迎えることが出来ました。これもひとえに多くの関係各位の皆様や、地域の皆様のご支援とご協力の賜物と心より感謝申し上げます。

コンクリート診断士制度は、2001 年にコンクリート工学会によりスタートされ、2018 年 9 月現在で 12,940 名となっております。

設立時は、わずか 17 名で発足しましたこの会も現在では特別会員 2 名を含め 43 名を擁するまでとなり、今年も数名の合格者があり活動や規模も年々大きくなってきています。また、各地区のコンクリート診断士会で結成した（一社）日本コンクリート診断士会に加入し、地域特有の劣化原因を、業務体験会の発表をつうじて情報共有と意見交換をしております。

本会は、日本コンクリート工学会のコンクリート診断士制度の趣旨に基づき、診断士業務の進歩・改善、診断士の技術力向上、社会的地位の向上、診断士の品位の保持、JCI の診断士制度発展等、コンクリート構造物の維持管理に関して貢献することを目的としております。2009 年度からは、コンクリート技術研修会を開催し、国土交通省 四国地方整備局の維持管理方針や公共工事の生産性向上（i-construction）、ICT の導入などの情報。高知県土木部からは、耐震・補修事例の紹介や温度ひび割れ（初期ひび割れ）に対する見解と、新設コンクリートの温度ひび割れ抑制対策や表層品質の重要性等について著名な学識経験者による話題を提供してきました。また、コンクリート診断士受験対策支援講座をはじめ、JCI 四国支部のインフラ構造物調査研究委員会を通じて地元自治体の道路橋・トンネル等の点検・診断に臨場参加なども積極的に行ってきました。

設立からの 10 年をふり返ると、21 世紀は造り、使いこなす維持管理が問われる“持続可能な発展”が要求されてきましたが、社会全体としての意識や関心は希薄で、コンクリート構造物の老朽化への危機感もさほど感じられない状況でした。アメリカの橋梁崩落事故や、直近ではイタリアのジェノバで起きたモランディ橋の崩落など維持管理の不備が指摘されております。我が国でも、この 10 年の間にコンクリート構造物の深刻な劣化や損傷が明らかになるような出来事が次々と起きています。特に、2012 年 12 月に笹子トンネルの天井板剥落事故により、尊い人命までもが失われ、社会インフラの維持管理が喫緊の課題であることが国民にも広く理解されるようになりました。

この 10 年の間で、コンクリート診断士やコンクリート診断士会に対するひび割れ抑制対策の問い合わせや初期ひび割れの原因調査の依頼など、期待や関心も寄せられるようになり診断士が果たす役割や責任も極めて大きくなっております。

2018 年度で「道路橋・トンネルの 5 年サイクルの定期検査」が一巡しますが、予算・人材が不足しているという課題も浮かび上がっております。これからも、この 10 年間の活動で得られた信頼の輪を大事にしながら地域のコンクリート構造物の維持管理に貢献していく決意です。

これまで本会の活動に関わっていただいた、全ての皆様に心より感謝申し上げます。

2018 年 9 月

高知県コンクリート診断士会  
会長 原田 隆敏